

女性の苦難はいつまで続くのか？ ヨヤーナ・ポッカレルさん（ネパール）

ネパールでは、古くからジェンダーに基づく暴力が横行しています。近頃は週に3件程度の強姦事件が報告されています。これはあらゆる意味で憂慮すべき事態です。我が子の身を案ずる母親が、娘を外出させないということがよく起きるからです。強姦事件の大半は農村地域で発生しているとされていますが、ほとんどの被害者は警察に通報しません。その理由として、家名を汚すことになるという恐怖心や、僻地に住んでいるといった地理的要因などが挙げられます。僻地では、郡庁舎内の警察署に届出をするにも、徒歩で何時間も移動しなくてはならないのが当たり前だからです。都市部では、ここ数カ月の間にも何件かの通報がありました。しかし、この件数は（農村地域における実際の発生件数に比べて）相対的に少ないと言えます。都市部では、警察やヘルスポスト（診療所）といった基本的な公共サービスへのアクセスが比較的容易だからです。

例えば先日、東部開発区域に住む17歳の少女が強姦の被害に遭いました。少女が意識を失いレイプされる様子を、加害者の男性は友人に携帯電話で録画させており、面白半分の犯行だったとも言えます。この事件については東部開発区域において詳細な議論がなされ、彼女は強姦犯を告訴しました。しかしその後、少女は村の有力者からの圧力で、告訴を取り下げるよう求められました。最終的に、彼女は強制的にこの強姦犯と結婚させられたのです。

また、4歳と6歳の姉妹が強姦の被害に遭う事例が最近発生しました。加害者は、この姉妹の72歳になる祖父以外に考えられませんでした。別の事例では、14歳の少女が祖父に強姦され、少女がその事実を母親に訴えようとする、祖父から脅迫を受けたということです。これらは、少女たちが強姦や性的暴行の被害者となった事例のほんの一部に過ぎません。この他にも、家政婦が雇い主による犯行の標的になるケースも多発しています。

さらに、女子生徒が教師によって強姦されるケースもありますが、その実際の発生件数は表面化している件数よりも多いと考えられます。このように、被害者の多くが未成年者で、近隣住民、教師、親戚などによる暴行の犠牲となっています。しかも、このようなケースは警察に通報されることなく、家庭内で解決されます。強姦の加害者が地元有力者の一族であれば決して罰せられることはなく、一方で被害者が貧しい場合は決して正義を手に入れることができないのです。つまり、この問題は本質的にパラドックスを含んでいると言えます。

最近では年齢や場所に関係なく、女性が危険にさらされています。例えば、ひと月ほど前に極西部開発区域に住む69歳の女性が強姦の被害に遭いました。このことから、高齢女性がターゲットにされることも容易に想像でき、あらゆる年齢の女性が一人で出歩くことの危険性を物語っています。年齢、人種、宗教を問わず、また家の内外にかかわらず、女性はこの性暴力という非人間的な行為から逃れることができないのです。

特に農村地域では、このような暴行の被害者が立ち直るためのリハビリセンターが整備されておらず、問題は悪化の一途をたどっています。被害女性たちは、恐怖に苛まれ、身を守る術も持たずに、暴力に無言で耐えることを余儀なくされているのです。被害者の大半は読み書きができず、家族に立ち向かう勇気もありません。

ネパール政府にはこの問題に対処するための計画があり、また多くの NGO が問題解決に向けた制度の導入に取り組んでいます。しかしながら、その足取りは遅く、政府当局のこの問題に対する真摯さがうかがえません。市民が社会において安心して暮らせる権利を政府が擁護しない限り、私たちは決してこのような事件の発生を防ぐことができないのです。

ネパールの立法議会内に設置されている女性・子ども・高齢者・社会福祉委員会が、性的虐待や強姦の被害者を支援する措置に関する条項を導入するよう、政府に対して指示を出してからかなりの時間が経っています。しかしネパールでは、強姦禁止法はいまだ改正されておらず、またその効果的な執行が常に問題となっています。この国の男性優位の社会において、女性は弱い性として扱われ、家族による家庭内暴力や他人による暴行に耐え忍ぶことを余儀なくされています。加害者に然るべき懲罰を科し、被害者に正義をもたらすよう真剣に対策を講じることが、政府にとって極めて重要であると私は考えます。それが実現する日まで、女性たちの叫びが止むことは決してありません。「女性はいつまでこの苦しみに耐えなければならないのですか？」



困難な生活を余儀なくされたドメスティック・バイオレンスの被害者